

彙報

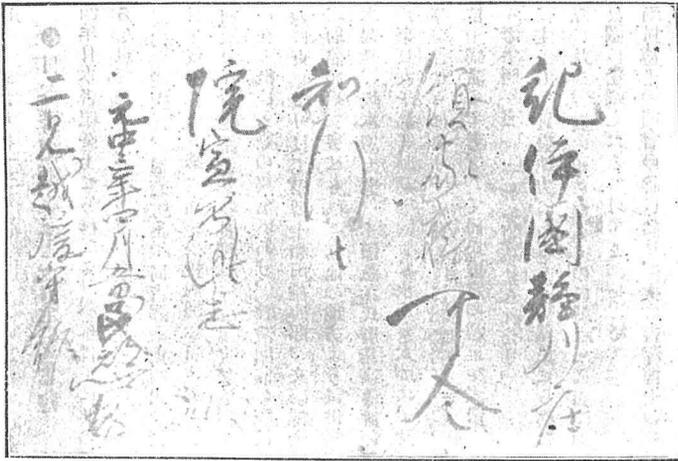
●帝國學士院授賞式

帝國學士院は去る五月廿五日を以て授賞式を行ひたり。受領者は第一部にありては高田忠周、第二部にては理學博士石原純、醫學博士山極勝三郎、獸醫學博士市川厚一、吳海軍工廠造機中監石川登喜治の五氏にして、高田氏は「漢字古綴編の研究」により學士院賞を、石原氏は「相對性原理萬有引力及量子論」により恩賜賞を山極市川の二氏は「癌種の人工的發生研究」により學士院賞を石川氏は「滿僉青銅其他の銅合金鑄鐵の鑄造に關する研究に就いて」により同じく學士院賞を何れも授與せられたり。

●二見文書の發見

大和の舊家二見氏の文書の寫は南行雜錄、地誌譯本二見氏文書其他二三の文書集に載するところにして、其原本の所藏者は或は吉野郡二見氏なりとも書し、或は宇智郡上野村櫻井慶幸なりとも記さるれど、未だこれか確むるに由なかりしが、今回奈良縣五條高等女學校教諭田村吉永氏の熱心なる搜索に依り、櫻井慶幸は宇智郡坂合村大字上野櫻井後藤治氏の先代にして、同氏の祖が、二見氏の後裔金融なるものより其文書を譲り受け、後親族大飼氏

に歸して、今は同村大字相谷大飼福實氏の家に傳ふること知られ今般同氏の紹介に依り京都帝國大學文學部國史研究室に借入れて影寫することとなり。安永三年十月二月金藏より櫻井後藤次に宛てたる讓證文には繪旨院宣廿貳通壹卷、感狀等之書物十二通とあれども、現存するは此二卷の外に正平四年の口宣案以下六通一卷ありて都合三卷なり、其中南北朝時代は繪旨院宣口宣案以下二十六通にして、足利時代は應永十五年の口宣案以下畠山義豐義英義榮主従の書狀多く、江戸の初淺野長晟の書狀に終る此文書につきて特に注意すべきは南北朝時代のものが悉く南朝の文書にして前後四朝に互り、北朝のものは一もこれなきこと是なり、是等は多く知行の安堵の外、勳功の賞言くは兵糧料所として新恩に浴せるもの及び感狀、出兵命令等なるが、當時同氏の所領は大和二見莊を始め河内和泉紀伊美濃の諸國に互れるを見るも、其深く南朝に倚賴せられ、且つ南朝と終始したりしを想ふべし。是等の文書の中元中三年四月五日の長慶上皇の院宣は紀伊國利生護國寺の元中元年の院宣と共に長慶上皇の院政を徵すべきもの、後者が散佚して今傳らずといふにつけても、最も貴重なる史料と謂はざるべからず、口宣案には洞院公夏等の自筆あり、楠氏關係のものとして正平十六年十二月十七日正儀の施行狀元中七年四月四日楠木右馬允に宛てたる施行狀あり。二見氏の系圖は傳らずと雖ども、



(書文見二) 宣院皇上慶長

口宣案と文書とを相對照せば略推測し得るべし、世に傳ふる二見氏文書の寫は何れも其一部に過ぎず、且つ謄寫の際誤脱あり、既而大日本史料の如きも、興國二年三月廿九日の後村上天皇の繪旨を漏らせり、尙以上の文書及び二見氏由緒書（荒山下一葉軒より二見金藏に贈れるもの）二見金藏の讓證文に據れば、二見氏は源氏にして、世々大和宇智郡二見莊に居る、南北合一の後には守護島山氏に仕へ、戰國時代には蜜藏院なるもの高野山に屬し織田信長の兵高野を伐し時防戰の功ありしが後遷俗して遠江守と稱せり子孫淺野家に仕へて紀伊に居り（由緒書に紀州大納言家とあるも淺野氏の事ならん）後浪人となり、金藏の幼時誘拐せられて日向に居ること二十年、寶曆元年大阪に歸り郷人に招れて歸郷し、二見氏を再興せしも、子なく年老い、且つ家貧なりしかば、家名の斷絶せんことを憂へ、傳家の古文書及び朱柄十字槍を舊縁ある櫻井氏に譲り、子孫の中にて二見氏の家名を繼がしめんことを囑し金五兩を惠まれ、家寶の目丸小旗一旗を身にして大阪に去り、往くところを知らず、後文政中櫻井後藤次祖先の言に基き、更に犬飼正左衛門（櫻井氏より出で、犬飼氏を繼ぎし人なりと傳ふ）其家に譲りて珍馳せりといふ（文政十二年三月櫻井後藤次父子連署の讓證文あり）南朝に對して斯ばかり純忠無二の名振たる二見氏文書の原本が今回圖らずも世に出づるの機會を得たるは、獨り學界の幸慶

たるに止らざるなり。(三浦)

●日本書紀編纂千二百年記念會

養老四年日本書紀奏上せられてより本年は正に其の千二百年に相當するを以て此の史界の盛事を記念せんが爲に、文學博士三浦周行、同内藤虎次郎、同新村出、同吉澤義則四氏の發起によりて五月十日午後一時より第三高等學校内記念館に於いて書紀の古抄本、古刊本、註疏關係書等の展覧を行ひ講演會を催されたり。當日定刻に先ち既に多數の來會者あり、講演開催の際は約五百名に及び、殊に東京よりは工學博士和田維四郎、文學博士黒板勝美、同辻善之助等諸氏參會せられ、其他の地方よりは伊勢神宮皇學館より鈴木暢幸、坂本廣太郎、千田憲治氏廣島高等師範學校より藤岡繼平氏奈良女子高等師範學校より水木要太郎氏、神戸より桃木武平氏等來會せられたり。來會者には記念圖書一組、展覧書目錄及び原博士講演の參考として同氏推定の結果を表示したる「日本書紀紀年考参照年表」一冊を頒布せられたり。

展覧書は主として近畿地方にあるものを蒐集せられたるものにして略百點に及び、其の主要なるものに就きては吉澤博士の説明を本誌雜纂欄に登載したるを以てこれを省略す。

講演は新村博士の開會の辭に始まり、次に吉澤博士の「日本書紀の古本に就きて」と題して展覧書の説明あり、續いて今西學士三浦

博士、原博士の講演ありたり其の要旨は左の如し。

朝鮮史料としての日本書紀 文學士 今西龍君

日本書紀記載の時代に相當する朝鮮史籍を挙げ、其性質内容より日本書紀の價值ある所以を説き、又、書紀に採用せる朝鮮の史料は早く亡佚し、百濟本紀、百濟新撰、高麗沙門道順の日本世記の如き、早き時代に日本に傳來せられしものなるべく、又書紀に記載せる朝鮮の人名地名の如きは驚くべく正確なることを例を挙げ且つ今日の研究によつて確証せらるゝ點を明示し、かの三國史記が底本として用ゐし三國史すら、人名地名が省略せられ漢譯せられて古体を失へるに反し、書紀の波沙縣錦、蘇那曷叱知、阿利那禮、宇流、助富利斯子、等の語皆一々これを今日遺存の金石文に照して、些の誤なきを見るなり。三國志東夷傳中の朝鮮に關する人名地名の如きも、日本書紀によりて研究すれば、三國志編纂の時既に失はれしことを知るべしとて、秦國王慶司、熊津、泉蓋蘇文を指摘し、書紀によりてのみ傳へらるゝ、朝鮮史料をあげ、書紀なかりせば今日尋ねべからざる點を仔細に述べられたり。畢竟書紀は古代朝鮮の歴史地理上に非常なる光明を與ふるものといふべし。この書紀が徳川時代の中葉に至つて朝鮮に入るや、直ちに朝鮮史家の眼に觸るゝ所となり、李德懋、柳得恭、韓致滄はこれを研究して、日本文化の淵源の違きに敬服せり、書紀は日本の至

寶、日本の名譽にして、將來に於ても書紀を朝鮮に示すことは、日本に對する尊敬の念慮を起さしむることなるべし。云々

文化史上より觀たる日本書紀。文學博士 三浦周行君

この問題は頗る廣汎にして、短時間の講語にて、要領を得るは困難なれども、先づ書紀が日本文化の淵源に如何なる關係を有するか又日本文化の變遷上に如何なる地位を占むるかにつきて述べしとて、推古天皇二十八年の國史編纂より説き起して書紀編纂の由來を述べ、古事記と書紀との性質を比較してその相異點を擧げ、近世の一部の國學者は漸く書紀を攻撃せんとしたれども、書紀の編者は彼の謂ふが如く、漢籍心を以て皇國の意を失ひしと看做すべきに非ず。わが國が大陸と交通を開き、支那文物制度を採用すると共に、一大缺點なりと覺えしは法制の缺如と共に國史を有せざることなり。史實に照してこれを考ふるも國史編纂と法制制定との間には密接なる關係を有す。日本書紀は勅撰最初の國史として、支那風の完全なる國史の体裁を具ふると共に、その日本の國名を冠したる處に深き意味の存するを洞見すべく、其内容は我國體國民性の特長を含む、行文の間漢文の成句を補綴せるが如きは當時に於て免るべからざりしなり。されば他の國史が支那の實錄に倣ひしものと、その選を異にし書紀は勅撰國史の隨一として最も尊重せられたり。更に書紀の研究を歴代の文化上より觀察

すれば、それと密接の關係を有すとて、奈良朝以後各時代に亘つて日本書紀が如何に尊重せられ、如何なる影響を及ぼし、かを述べ、特に神代卷が建國の古傳説を傳へしわが文化の淵源を説く經典として愛讀されし事實と、書紀研究の經過とを説明し而かも書紀の紀年其他記事の内容については、學問上より猶研究すべき餘地あるべきを指摘し、これが解決は將來の史家に待つ所多しと結ばれたり。

書紀々々考

文學博士 原暉郎君

從來書紀の紀年に疑を懷き、眞福寺本古事記の天皇御紀年の千支によりて書紀の紀年を訂正せんとせし多くの學者ありしも、書紀の史實を如何に按排すべきかに就ては常に等閑に附せらるゝの嫌ありて從來の遺方は未だ吟味を経ざる假定説に過ぎず。然れども書紀を丁寧に繙讀する時は記事の重複撰者の誤解及重複誤解の原因を明に知り、茲に書紀が自ら作り出さしむる紀年を知るべし即ち予は書紀を材料として紀年を作り出さんとすと述べ、別に來會者に配布する所の書紀紀年々表に就きて説明を加へつゝ、本論に入り、最も確實なる推古天皇の在位年數を根本として論歩を進め紀は元年より三十六年を算し記は廿七年を數ふ。是れ紀は支那風に即位の當年を數へざる爲めに兩者一年の差あるのみにして、矛盾に非ず、然るに崇峻天皇は紀にありては在位五年記にありては

數へ年四年用明天皇は紀は二年にて記三年也、此の兩者の矛盾は紀にありては全体の年數より割出して在位年數を充てたるに反し紀は着實に是を充てたるものにて、予は記を採用せんとす、かく推古紀の年代を基礎として順次上代に溯りて天皇の在位年數を定め、欽明紀に於ては敏達天皇の立太子の年代と佛法渡來の年代とを材料として其の在位を丙子より癸巳の十八年と推定し、雄略紀に於ては其在位年數の記紀所載の廿三年を承認して支那の宋の順帝昇明二年倭王武の貢入せる記事及三國史記の日本軍の高麗軍を破りたる記事等を參酌して、雄略天皇の在位は己酉より辛未に至る廿三年と推定し、又應神紀七年丙申の條に韓人等に命じて池を掘らしめたる記事の更に仁德紀十一年癸未の條に出るを以て、兩者を比較するに、恐らく一つの事件を誤りて天皇御宇と干支と別々に兩所に挿入したるものなるべく、應神天皇七年は必ず癸未ならざるべからずとし、丁丑元年より乙未に在る十九年在位と推定し、最後に神功皇后の記事は干支二廻り下に持來らば予の推定の紀年と合致し、仁德五十一年癸亥に當る倭兵大至と云ふ三國史記新羅の記事は恰も神功皇后の攝政第一年に來る。斯くの如く神功皇后を干支二廻り上世に置きたる所以は書紀の撰者が屋馬蓋國卑彌呼を以て神功皇后と速断したるが爲めなり、かくて神功皇后と推古天皇との間に年代に於て多大の空隙を生じ、是れが填充の

爲めに仁德紀に於ては其の在位を八十七とし允恭紀に於ては是れを四十三年として苦心の跡を留めたるなり云々。(岩橋、橋川、源)

●京師帝國大學第十回夏期講演會

京師帝國大學に於ては例年の如く來る八月一日より各種學科の智識普及の目的を以て第十回講演會を開催し、一般有志者の聽講を許すべし。其中史學地理學及び之に關係ある科目、科外講演の題目並びに講師左の如し。(申込期限七月廿一日、委細は京師帝國大學講演會宛照會の事)

- 國勢調査(自一日至七日) 經濟學部教授 法學博士 財部靜治
- 朝鮮史概説(自四日至九日) 文學部助教授 文學士 今西 龍
- 支那印度と希臘羅馬(自四日至九日) 同教授文學博士 榑亮三郎
- (科外講演)
- 鑛山の話(一日午後七時) 工學部教授 工學博士 小田川達朗
- 近世の繪畫に於ける自然(五日午後七時)
- 文學部助手 文學士 植田壽藏
- 斐列の話(六日午後七時) 法學部教授 法學博士 山田正三
- 歐洲に於ける十字軍長征後の社會的變動(七日午後七時)
- 文學部講師 文學士 植村清之助
- かたのはなし(八日午後七時)
- 同助教授 文學博士 吉澤義則

●京都帝國大學考古學研究報告第三冊の出版

京都帝國大學文學部考古學教室に於いては、其の研究報告書第三冊を發刊せんとし、今や印刷中なるが其の内容は第一冊に報告せられし以外の、新發見の九州裝飾古墳に係るものなり。就中肥後釜尾の古墳の珍奇なる裝飾は三色版木版等多數を以て、精巧なる複製を試み、其他天草維和村發見の刀劔刀子の珍らしき彫刻ある石棺、久留米上津荒木の古墳には所謂直弧紋の裝飾ある石棺等あり。凡て玻璃版三十枚に近く、其の体裁は前三冊に相同じ。なほ卷末には近時考古學界の問題たる彌生式土器の學術的分類を試みたる「ヒクトリアル、インベントリー」を附し、我が考古學研究上の基礎的調査に資せんことを努めたりと云ふ。八月中には發行を見る可く、實費金三圓位にて、丸善書店より發賣さる可きが直接考古學教室に申込むも可なりと。

●京都帝國大學文學部史學科

來學年講義題目

- 史學研究法 每週 二 坂口教授  
 國史概説(近世) 二  
 幕末外交史 二 内田教授  
 明治時代史の特別問題 一

第四卷 紹 介

- 國史綱讀(中世) 三 浦教授  
 貞永式日の研究 二  
 室町時代の神道及佛教 二  
 古文書學概説及實習 二  
 東洋史概説(古代) 二  
 唐律の研究 二  
 漢書西域傳解説 二  
 支那叙里亞交通に關する史籍講讀 二  
 東洋史概説(近代) 二  
 支那史學史 二  
 史籍講讀 二  
 元代公版 二  
 最近世史 二  
 世界大戰史 二  
 西洋史概説 二  
 メアイチ家時代の以太利 二  
 地理學通論 二  
 日本群島 二  
 考古學概論 二  
 同 實習 二
- 桑原教授 二  
 内藤教授 二  
 原教授 二  
 坂口教授 二  
 小川教授 二  
 濱田教授 二

第三號

一六三 (五一七)

東洋考古學(支那)

古代希臘の文化

日本文化史

朝鮮上代史

李氏朝鮮史概説

蒙古史

拜疆發見史料解説

人文地理學通論

交通及墾落地理

國史概説(古代)

古代史の特別問題

國史地理

英國文化史

ゲルマニ諸族建國時代史

人類學

●京都帝國大學文學部卒業論文

京都帝國大學文學部本年度卒業生の提出せる卒業論文中、史學科及び哲學文學部科中史學に關係ある題目並に提出者左の如し。

史學科  
國史專攻

正徳の幣制改革及長崎新令に就きて

江戸時代浪人の研究

支那史專攻

歴史としての史記の基礎と其方法

東洋史專攻

明の對虜策と俺答汗の封貢

西洋史專攻

サラセンとビザンツ

地理學專攻

大和平野に於ける墾落の研究

黄河下流平原の變遷

哲學科

哲學專攻

プラトーン氏靈魂説

印度哲學史專攻

無量壽經の研究

釋尊の根本教理

密教の哲學的基礎

支那哲學史專攻

二程子論

桑原親通

鈴木 登

丹羽正義

横地得三

安藤俊雄

淺若 崑

藤田元春

村主岩吉

大地原誠立

藤谷宗順

中井龍瑞

平田霜初

(選科)

(選科)

(選科)

(選科)

(選科)

(選科)

(選科)

(選科)

倫理學專攻

アリストテレスの徳

荷子の道徳觀

教育學、教授法專攻

フレイベルの研究

美學、美術史專攻

寧樂朝彫刻史論

宗教學專攻

原始教會とパウロ

原宗の起原

保羅と觀鷲とに就いて

社會學專攻

武士道の研究

我國に於けるブルジョア階級

の發達と資本主義的精神

文學科

國文學專攻

童戯人瀧亭鯉丈

序歌の推移

(選科)

河畑立詮

三井金一

末包留三郎

(選科)

伊勢專一郎

菅 園吉

阿部 現亮

清水 曉昇

沓澤吉太郎

(選科)

關谷 弘

重永 潜

渡邊 均

藤田 森之助

源氏物語傳本の系統

支那語學及支那文學專攻

詩の昊天に就きて

英文學專攻

Richard Brinsley Sheridan

Walt Whitman

Gosling's Short Story

Christopher Marlowe

"A Persian Ruse in the Garden of Egleham"

(On the Khatyāt of Oman Khayyām.) 小林 象三

◎故富岡龜藏氏追悼會

昨年十二月廿三日長逝せられたる本會評議員故富岡龜藏氏の爲  
知友間の發起にて去五月十一日を以て京都市大雲院境内家政女學  
校講堂に於て行はれたり。當日は故人の手澤本遺愛品を陳列して  
展觀に供し、又内藤小川黒板博士其他の知友の故人の學問性格逸  
語に關する追憶談ありしが、其中故人の晩年に日々觀笑して其研  
究を助けたる梅原末治氏は、當時故人の最も力を致せる鏡鑑の研  
究に關して、

氏の研究は先づ材料の集成と其の分類とより初まり、次に種  
々の方面より一々の形式に就き製作の年代を考定して、之よ

山 脇 綏

中野長右衛門

石田幸太郎

新里文八郎

内藤修一郎

山本修二

り支那古鏡鑑の沿革の體系を確立したるものなることは其の業績の示せる如くなるが、更に近くは其の各の系統を考へ南北支那に於いて形式の異なるを注意し、本邦出土の支那古鏡を驗して、其の分布に合せ考へ、之よりして古代日支間交通の變遷と我が國家發展の年次に就いて新見解を下し、遺物より見る時は我が大和朝廷は畿内に於いて成立し後漢代既に支那に通じたるべく、魏志の耶麻台國従つて大和に比定すべきものなりとの結論を得られたり云々

と述べて故人が最後に抱懐せる學說を紹介し、其の完成を見ずして逝けるを悼惜せり。

當日の來會者は荒木京部大學總長以下各學部教官卒業生故人の知己友人等亡虜二百餘名にして、中には東京奈良大阪方面より態々參會せられしもありたり、今陳列品の主なるものを開列すれば略左の如し。

- 書畫幅の部 劉石菴書幅、馮惠言書幅、鄧完白隸書大軸、揮南田書幅、張得天書幅、張宗蒼畫、鶴夢圖、仇英唐荆川石湖軒、錢叔美小亭納涼圖、馮之鼎士龍畫像圖、改七端善天女圖、費丹旭美人圖等。
- 金石拓本の部 毛公鼎全形拓本、孟鼎全形拓本、周瘡庚金全形拓本、散氏盤全形拓本、六舟手拓漢洗拓本、屠琴鳩補菊圖、金吉石器

- 藏金文拓本、古録集冊、胡石查手拓陳壽鄉土廉生所藏齋月拓本、同古泉拓本、陳氏萬印樓印譜、胡石查舊藏吉金樂石拓本、老蓋印存、開蒸長輪石銘、舊拓漢延光殘碑、北海相景君碑、舊拓開道褒斜進碑、白石神君碑、漢曹景完碑等
- 和漢佛藥古鈔本の部 伴信友自筆八所神藥考、舊鈔本草花物語、古寫枕草紙、上田秋成自筆春國物語、荒木田守良鹿龜雜草箋、舊鈔本草集類抄、元和庚申原刻破提字子、山中文書、高橋景保著亞歐堂銅版萬國小輿圖、藤井貞幹自筆公私古印譜、古寫周易正義唐鈔毛詩正義、宋槧附釋音本春秋公羊傳、古鈔本論語義疏、海保漁村手稿春秋正義點勘、同唐石經公羊傳攷證、北宋本史記集解卷、朝鮮舊活字本馬令南唐書、圓光寺本寫本三國史記、舊鈔本瀛涯勝覽、四譯館考、鄭舜功日本一鑑、督撫雜略、李復堂舊藏黃山圖、元槧本考古圖、舊鈔本吳本宣德彝器圖譜、內府本四庫全書子部六藝の一、翁覃溪手稿天際島雲帖跋、元和制活字本群書治要、五山覆北宋本白氏六帖殘本、宋槧新編翰苑新書卷本、永樂大典零卷、舊鈔本遊仙窟、五嶽真形圖、五山版前史略、同雪堂室和尙外集、回々教典、蕭雲從離騷圖、唐鈔王勃集零卷、影宋本二李唱和集、五山覆元本虞道園翰林珠玉、采蘭修文集、古寫瑜伽師地論零卷、廣瀨寺天王宮仁王經、紺紙金銀泥廣弘明！、敦煌本金剛般若經開支記、同唐終法華經零卷、同大般涅槃經零卷、同觀世音經。



殆んど今日唱導せらるゝもの、根柢を爲せるもの、如く、各國より委員を選出して仲裁々判制度を設け、各國軍隊に制限を附するなど比較的大規模の企なりしと思はるゝも、其の實行の點に於ては支障百出遂に目的を達し得ざりしなれば、今回の舉も亦蓋し其の實行不可能ならむかを思はる云々、

會場には内田博士將來の各種書籍を列陳し、同博士より一々綿密に説明せらるゝ所あり、來會者四十餘名午後五時閉會せり。

五月十七日午後一時より文學部第九教室に於て開催す。

一、服忌制の遷遷を論じ徳川初期の道德史に及ぶ。

會員 文學博士 原 勝郎君

此の講演は本號研究欄に掲載する所なり。

一、Racial Prejudice and its Remedy.

(人種的差別の偏見と其の匡正)

Dr. Gerson Munro

ダニエル・モルトン・マンロー君

先づ人類の起源を説き、ヒテカントロプスより舊石器時代諸人種及新石器時代人類に關し述ぶる所あり、現代諸人種は動物學上單一なる種に過ぎざるのみならず、諸人種の人類學的特徴は既に舊石器時代以降互に雜交混和し、妄りに優劣其他を區別す可きに非ず。況んや皮膚の色を以て、人種の優劣に劣等を分つが如き學術

上列等の根柢ある無し。皮膚の色は風土氣候によりて變化し、周圍の自然に順應せんが爲めに生ずるものなり。斯の如き人種的偏見は智識の開拓と理想の向上とによりて除去するを要す。人類學的智識の増進により、世界各人種に關する報道を普及することは即ち此の偏見の匡正に對する適切な一療法なり云々。

講演終了後本部樓上談話室にてマンロー氏の爲に有志晚餐會を開き荒木總長以下出席午後九時散會せり。

●讀史會

例會 三月二十日午後六時より學生集會場に於て、内田博士歸朝の歡迎を兼て、例會を開く。會する者内田、三浦、喜田博士、西田、清原、江馬、魚澄、中村、牧、下川、富森學士並びに桑原、鈴木、橋川、源、岩橋、梅原、島田、樺原の諸君にして、先づ左の講演あり。

一、徳川末期に於ける復古國學者と儒學者との論争

文學士 清原貞雄君

徳川幕府を中心とする儒教は林家の獨占する所なりしも、この林家の朱子學に對抗せる復古學派の現れしに次で、國學者の間に復古派の起るありて、朱子學の一大強敵たり。荷田春滿、本居宣長、平田篤胤はその復古國學者中に於て屈指すべき人々なり。眞淵が國意考を著したるに對して、先づ應戰の火蓋を切りしは海

野公台の讀賀茂眞淵國意考なりしが、これに對して橋本稻彦は更に辨論國意考を著し、眞淵の功の没すべからざるを述べて、公台の文を逐條批評せり、然れどもその大要を約していへば眞淵の思想を繰返せるに過ぎずして、漢字の如き象形文字がわが國に入らざりしならんには、わが國獨自の音韻學の發達あるべかりしな、漢字の輸入のため日本の文明を阻害せしなりと論議せり。本居宣長が直毘靈を出すや、市川匡(鷹)は末賀能禮一卷を著してこれに應へ、わが古代の神話は人事として道理を以て解し得べきものとし、宣長の神話觀を攻撃せり、宣長は安永七年、葛花二卷を著して末賀能禮を駁撃し、日本神代の傳説は漢意に泥んで計るべきに非ずといへり。次で國學者の風を挫うて眞淵宣長を攻撃せしは沼田順義にして、科長戸風、國意考辨妄の著あり。殊に科長戸風は兩派の論争中最も著しきものにして、順義の國學者攻撃に對して篤胤の門人新庄道雄は葛糧を記して反駁し、原田重枝も科長戸風に對して加倍之題風を示せり。かくして天保五年靜齋義雄が加倍之題風辨妄を著して攻撃の一矢を報ゆるや、神傳加倍之題風を以てこれに應へたり。其他小林文康、三芳野直道、菅原定理、伊勢茂美等相次で競ひ起り、猶これより前藤井貞幹と上田秋成との間にも論戦ありしが、最後に最も漢學を攻撃したりし篤胤となす篤胤が眞淵宣長等と異なる點は、儒教の外佛敎に對しても攻撃を及

ぼし、事にあり。要するにこれら兩派の論事は、國學者は支那のもの、攻撃をなし、漢學者は眞淵宣長を標的として日本神代の未開非文明なるを指摘するにあり。然れども末輩に至りては論旨枝葉に亘りて揚尼取を事とし、其態度慳慳すべし云々。これに對して内田三浦博士の質問及び批評あり、終つて三浦博士は起つて内田博士歡迎の辭を述べられ内田博士これに答へられたる後左の講演あり。

一、歐米漫遊談

文學博士内田銀藏君

博士は約百九十日間の行程を述べられたる後、主として加奈陀北米合衆國、英國に於て歴訪せられし、大學及び圖書館の概況につき有益なる談話あり。終つて質問應答に興湧き來會者一同歡を盡して十時散會せり。

四月二十九日午後六時より學生集會場に於て開催、出席者は内田、坂口、三浦、喜田の諸博士、中村、魚澄、川島の諸學士及び桑原、鈴木、橋川、源、島田の諸君にして、左の講演あり。

一、徳川時代に於ける支那の書籍特に經學の書籍の波來について

文學士魚澄總五郎君

徳川時代の初期には藤原惺窩林道春等世に出て、わが經學史上空前の發達を遂げ、享保十七年には長崎奉行の手によりて、久しき戦亂のために大半の書籍を失へる支那にわが國にて出版せし書

籍を輸出する程なりしが、清朝の天下統一するに及んで十八省通誌四庫全書の如き空前の大著編纂相次ぐに至り、一方には王船山等出で、清朝獨得の考證學も勃興せり。元文元年將軍吉宗は古今圖書集成六百六十冊を得て、その完本なるや否やを疑ひ、調査せしむる所ありしが、三十七年後の明和九年二月に至りて遂に全部一萬冊の渡來を見たり。欽定大清會典は享保十九年に渡來を見たるが、吉宗が長崎奉行に命じて度々持來らんことを命ぜし所にし、吉宗の好學を察するに足る。この頃康熙字典、皇清經解の編纂ありしが、安永七年には索引一卷と添へて翻刻せらるゝこと、なれり。當時もてはやされしは此程の欽定本にて、中にも御纂七經、乾隆三經等わが國にて流行し、金澤藩これを翻刻せり。猶最も注意すべきは六諭衍義の流行なり、こはもと琉球薩摩を経て幕府に献上せられしが、享保七年に至りて江戸附近の手習師匠にこれを頒ち習字の手本となさしめたり。これらの書籍の尊げれ且讀まれしは事實なれども實際何程の影響を與へしかば不明なり、其他幕府より洋商に命じて各種の書籍を注文し、舶載せられし書籍にして翻刻を見たるもの少なからず、昌阜燬にて一九九十三部の出版をなしたる中清人の手になりしものは四十部、即ちその五分の一を占むる程にて、清朝の學風の影響する所少からざりしを察すべし。類聚名物考、群書類從の如きは、清朝の大著述大編纂の

感化を受け、享和元年に成りし群書類一覽は、四庫全書總目提要に倣ひしに非ざるか云々。

一、福井縣史料採訪談

文學博士 三浦周行君

福井市大野町に於ける文書、吉崎道場、三國港の遺蹟、鯖江町に於ける舊澤間部家舊記、其他主なる寺院個人所藏の文書等を通じて注意に上りし所を説かん。鯖江町にては多數の舊藩記録を見たるが、正徳頃最も多く、藩主の日記、隨筆無慮三百冊に上れるあり。なほ十月十八日付細川晴國より糠川彌九郎宛の感狀とこれに添へたる新井白石の長文の書狀によりてこの感狀の出處由來を明かに知るを得たり。この感狀は白石が在洛中偶然に得たるものにて、白石はこれによりて間部氏が藤原仲光の子孫なることを考證し得たりとなせるにつきて、これを批判し次に三國町、大野町の史料を擧げ、三田村文書によりて越前奉書の起源を尋ね、足利幕府の管領たり越前守護たりし斯波氏の頃、御教書を認むる用紙として國産の紙を用ゐ、もと御教書紙といへることを明かにし、今日國産たる絹織物につきては福井市の橋氏文書に、唐人座輿物座の文字あり。次に足利時代同地方の馬借が陸上の交通のみに限らず、水陸共に貨物の運送に従事し、材木蓋の專賣權を有し居れること、問屋は三國港に於て發達せしことを述べ、神社の信仰より平泉寺豊原寺に言及し、吉崎道場の形勝の地を占めしことを説

明して現存せる蓮如上人の遺物を擧げ、由來越前人には一摸性とも稱すべきもの、潛在せるに非ざるかと興味ある問題を與へ、最後に敦賀にて見られし頼山陽自筆の書狀によりて、日本外史の記事についての山陽の用意の存せるところを語られたり。

一、長崎旅行談

文學博士 坂口 昂君

予は歐洲漫遊中、屢々天主教寺院を訪れてその氣分を變したるが、今回長崎の天主堂を訪ふに當りては先づ我國基督教現勢上に於ける長崎の位置を統計的に知らんとせり。大正五年十二月末日の調査によれば、全國基督教徒の總數十八萬八千にして、その中天主公教は七萬、而して其七萬中三萬九千餘は實に長崎及びその附近に占住せりとて、長崎市の町はづれ大浦の金堂、市内西坂の會堂より、郊外浦上の會堂について詳述し、その古き遺物と研究資料とを擧げ、轉じて島原の城址について、その歴々地形を點指し得べきを述べられたり。

一、福岡旅行談

文學博士 内田銀藏君

先づ福岡に至る途次、廣島に於て高等師範學校附屬の教育博物館を參觀し、同館内に於て開催の代用品展覽會を見られたること述べられ、次に福岡の貝原家に就きて、益軒先生の日記雜記備忘誌其他を調査せられし斷末を説かれ、それらに基きて益軒の人物性行及び學問を論じ、又これらの記事が益軒と交際ありし當時

の學者のこと、益軒の旅行せる地方の狀況を知る上にも種々參考となるべき旨を指摘し、その例として京部及び兵庫に關すること擧げらる。最後に又縣立福岡圖書館所藏の舊福岡藩農政に關する舊記を取調べられたる結果を一言せられたり。

支那學會

例會 三月廿四日午後六時より文科大學第九教室にて開催、狩野高瀬、諸教授、今西、羽田、鈴木各助教授、新城博士以下會員三十餘名出席左の講演あり、午後九時散會せり。

一、支那語入聲音の言語學的研究 文學士 高畑彦次郎君

由來言語學者は支那語のモノシラビックにして語尾變化の無きを以て之を下等語と見做すを恒とすれども、唯エスヘルセン氏は之に反對し其の決して下等語ならざること論証し居れるが余も亦氏に同感する者にして蓋し古代の支那語は複雑なりしなるべし今一二の例証を指摘せむか、南曲にて聲(へ聲)を他の聲にて讀まざるべからざる時に窩と讀みを落(カ)さしむるが如きありて、蓋し五六百年以前の支那語は概して入聲音の最後の *ト* *ト* *カ* を落したるものならむと考へ得られ、唐代に織を織と讀むも亦其の *カ* を落せるを知り得べく、又漢代に燭の音主なりとあるも亦 *カ* を落せるなり。但し入聲とは緩字と調との二種の意あり平上去聲は調の差を示すを以て目的とするに反し入聲は緩字と調と兩様の差あれば

或は入聲は必しも平上去の如く相型列すべきものに非ざるかも知れず、古代人には吸氣にて發音する習慣多く野蠻なる言語には調の抑揚著し、又後世に及ぶに従ひ綴字は順次簡單に傾くなれば之よりすれば異字同音の語は多數出現する譯にて、之が區別を爲さむには調に依る外手段も無ければ、支那語の四聲は蓋し此の必要より自然に起れるものなるべし云々。

支那學生歡迎會 四月二十二日午後四時より京都帝國大學々生集會場樓上に於て、學事視察の途上偶入落したる支那南京高等師範學堂教授學生等八十餘名の歡迎會を開催す。松浦幹事支那語を以て歡迎の辭を述べ、狩野内藤近重三教授の支那學に關する講演あり、一同座を交へて懇談、午後七時散會せり、會員の出席者は狩野内藤桑原高瀨諸教授鈴木助教以下二十餘名

豫饒會 五月十五日午後五時半より京都帝國大學々生集會場に於て豫饒會を開催す、來會者は狩野内藤桑原高瀨諸教授鈴木羽田諸助教授卒業生卒業豫定者在學生等二十五名紀念攝影終りて晚餐を共にし午後九時散會せり。

● 山城乙訓郡史蹟展覽會

京都府乙訓郡役所に於ては、郡史評議の計劃を立て昨年來其史料を蒐集しつゝありしが、五月廿三日より三日間同郡向日町高等小學校に於て史蹟展覽會を開催し、汎く乙訓郡内史蹟に關する諸

種資料の展覽を行ひ、京都帝國大學所藏品を始め郡内の社寺並に舊家藏品の出陳多かりき、陳列品の主なる者は、大枝村發見宇治宿禰墓誌銘、長岡宮乙訓寺福田寺等古瓦向神社、應永廿五年禪札、薩宮八幡宮所藏胡麻油麻關係文書、善峯寺光明寺所藏の繪旨類大原野神社の足利將軍御教書、寶蔵寺の應永十七年罽口、善峯寺古岡觀音寺所藏曹臣秀次秀頼書狀、其他郡内舊家にては調子、井尻正田氏の襲職文書、渡邊氏の朝鮮人來聘に關する記録岡本尹世著西岡野史稿本等ありたり。

● 攝津西宮史談會概況

同會本年一月以後に於ける狀況を概言せん。一月廿一日には、幹事田澤金吾氏が和歌山縣史蹟調査會の囑に應じ調査したる海草郡西和佐村岩橋の古墳調査に關する報告あり。猶河内高井田古墳の紋様拓本の十數種につき説明する所ありたり。二月廿一日には幹事吉井太郎氏の「菟原地方の史蹟」と題する講話ありて。菟原の地名、郡名、莊名、和泉地方との海上交通、住吉神と津守氏、求女塚傳説の意味、扁脈會塚と岡本の俚諺等に亘りて叙述を、三月二十一日には會員文學士辰馬寛藏氏の「石鏃から銅、鉄鏃へ」と題する講話あり。日本における石器時代民族が石鏃使用期より金鳥製の鏃を用ゐるに至れる過渡期につき評論し、銅鐵使用は支那民族の影響、鉄鏃使用は北方民族の影響を蒙れるものならむと

言ひ、四月二十一日例會には幹事浦家易直氏の武庫郡芦屋村出土の釜及葎形土器の談話あり。五月三十一日は亦幹事江野芳雄氏の武庫郡大社村葎具三島郡の古墳跡査談あり來會者毎回十名内外あり。尙六月八日第二回考古資料展覽會開催の筈なり。(會員吉井太郎氏報)

會報

例會 三月十五日午後一時より文科大學第九教室に於て開催左の講演ありたり。

東航雜談

會員 文學博士 内田銀藏君

第十七世紀に於ける國際聯盟 會員 文學士 長 壽吉君

五月十七日午後一時より文學部第九教室に於て開催左の講演ありたり。

服忌制の變遷を論じ徳川初期の道徳史に及ぶ

會員 文學博士 原 勝郎君

Racial Prejudice and its Remedy  
(人種的差別の偏見と其の匡正)

Dr. Gard n Munro

編纂會 五月五日午前十一時より文學部陳列館貸室にて開催、三浦、濱田兩評議員以下岩橋、下田各委員島田書記出席、經緯を

務を處理し、同十三日午後三時より同所にて開催、三浦評議員西田、中村、那波、下田、岩橋各委員島田書記出席、本年七月號の編纂を了せり。  
書記買送 本會書記飯原末治氏今般都合により辭任、島田貞彦氏新任せられたり

寄贈交換圖書

法制史の研究

三浦 周行

滿鮮地理歴史研究報告五

東京帝國大學文學部

近世の日本

内田 銀藏

元祿時代觀

中村 孚也

小樽の古代文字

中目 覺

自然科學より見たる日本神代史

神原信一郎

史學雜誌 三〇の一、二、三、四、五、六

史 學 會

歴史地理 三三の一、二、三、四、五、六

日本歴史地理學會

歴史と地理 三の四、五、六

京都史學地理學同攻會

考古學雜誌 九の五、六、七、八、九、十

考古 學 會

經濟論叢 八の一、二、三、四、五、六

京都法學會

國學院雜誌 廿五の一、二、三、四、五、六

國學院大學

飛彈史壇 四の六、七、八、九、十、十一

飛彈史談會

東洋哲學 廿六の一、二、三、四、五、六

東洋 大學

佛書研究 五〇、五一、五二、五三

佛書刊行會

六條學報 二〇七、二〇八、二〇九、二一〇 京都佛教大學

武藏野 二〇一 武藏野會

伊豫史談 十七 伊豫史談會

會員動靜

入 會

朝鮮馬山嶽關支署

滋賀縣犬上郡多賀河多賀神社

甲府市元連雀町二

奈良縣立五條高等女學校

(右紹介者、三浦周行)

京都眞宗大谷大學内

同

同

京都市間ノ町上珠敷屋町下ル木村方

京都市下珠敷屋町 護法館

(右紹介者、橋川正)

京都市中立賣通新町東

(右紹介者、濱田耕作)

京都佛教大學寄宿舎内

(右紹介者、植村清之助)

東京府叻多摩郡代々幡町代々木一四四

(右紹介者、白石止邦)

東京市本郷區駒込東片町一三六

(右紹介者、板澤武雄)

京都市田中町養正尋常小學校

支那江蘇南京高等師範學校

(右紹介者、郎波利貞)

東京市神田區小川町五一

大阪市北區北野東ノ町六二六

京都市下河原高台寺前

京都市寺ノ内千本東入二丁目

(右紹介者、島田貞彦)

大阪市東區餅屋町高津中學

(右紹介者、魚澄惣五郎)

愛媛縣松山市湊町四丁目一三四

(右紹介者、岩橋小彌太)

死 亡

高 屋 善 吉

染 野 光 瑞

有 馬 宗 嗣

白 澤 清 久

舟 木 益 五 郎

柳 諒 徵

賀 古 鶴 所

山 田 角 人

明 石 國 助

能 勢 五 三

金 子 光 介

伊 豫 史 談 會